



Title	デンマーク語母音の音長変化
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN. 1978, 4, p. 3-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95884
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語母音の音長変化

間 瀬 英 夫

1.1. 母音が文法的あるいは音韻的条件により長音化されたり短音化されたりする現象は種々の言語にみられよう。そして、この長・短音化は音韻プロセスの種々の時点で起こり得るであろうし、その音長変化を支配する条件次第で「(形態)音素的」変化というべきものもあろうし、「音声的」変化であるものもあろう。本論では、生成音韻論的に言って早期の規則である形態音韻規則による変化を「長・短母音化」(または「音素的長・短音化」)、後期の規則によるプロセスを「長・短母音状音化」(または「音声的長・短音化」)と呼ぶことにし、「長・短音化」は母音音長変化の総称として上述両者を含むもの、または議論の都合上、上述二者を区別していない段階での音長変化を示すものとして用いることにする。なお、対象とする母音は語レベルで主強勢をもつ母音とする。

デンマーク語における母音音長変化は他の言語におけると同様に多様であり、また筆者の研究がその緒についたばかりであるので、その全てを論ずることはこの小論では到底できない。そこで、本論ではデンマーク語母音における種々の要因による長・短音化の中から具体例として動詞、形容詞の短音化をとり上げ、これが(予想されるように)形態音韻規則に支配される短音化であることをまず第一に明らかにする。次に、このプロセスの出力形である音声形が必ずしも語レベルにおける最終的顕現形(=発音形)ではなく、さらに音声的短音化が適用され得ることを述べ、二種の短音化の区別およびその重要性を明らかにしたい。母音音長変化の中、長音化はそれほど活発ではないので、これについては §4 で簡単に触れることにする。そして、§5 ではその他の要因による長・短音化の例を示し、最後に、素性 [tense] と [long] がデンマーク語では相補的な素性ではな

く、各々の独立の素性であることを述べる。

1.2. 本論でいうデンマーク語（以下、デ語と略す）はコペンハーゲンを中心とした標準語で、年輩の世代の慣用である保守的な口語（＝RM1）と若い方の世代の慣用である進歩的な口語（＝RM2）を含むものとする。両言語には長母音と短母音の音韻的対立があり、この音韻的相異は基底音韻表示ですでに指定されているのが適当であると考えことにする（これについての論拠の詳細は拙論（1976）参照）。

これらの対をなす長・短母音の音声形における相異は‘主異音’環境（＝/r/ に隣接しない環境）ではほぼ量的なもので質は同じである場合が多い： $/i(:)/=[i(:)]$ ， $/e(:)/=[e(:)]$ ， $/\varepsilon(:)/=[\varepsilon(:)]$ ， $/y(:)/=[y(:)]$ ， $/\phi(:)/=[\phi(:)]$ ， $(/\ae(:)/=[\ae(:)])$ ， $/u(:)/=[u(:)]$ ；同上環境で対をなす長・短母音の音声形が量のみではなく質も異なるのは次の3対である： $/o:/=[o:]$ ， $/o/=[\text{ɔ}]$ ， $/ɔ:/=[\text{ɔ:}]$ ， $/ɔ/=[\text{ʌ}]$ （または $[\text{ɐ}]$ ）， $/a:/=[\text{æ:}]$ ， $/a/=[\text{a}, \text{ʌ}]$ 。その他の環境の音声形については必要な場合に言及するが、詳しくは拙論（1974；1976）を参照されたい。

さて、ある音長変化が音素的变化か音声的变化であるかを決定するためには文法的条件とか音韻・音声的に自然な変化か否かといったことが中心的要因となることはもちろんであるが、本論では簡単な作業基準として上述の量と質の異なる音声形をもつ長・短母音対にできるだけ注目することにする。

2. 形態音韻的音長変化：

短音化は一部の動詞および形容詞の一部の屈折形に、長音化は一部の名詞の一部の屈折形に起こる。

動詞における語幹長母音の短音化は過去語尾、過去分詞語尾として各々 $-te$ (/tə/[də])， $-t$ (/t/[d]) をもついわゆる弱変化第2類動詞の過去形、過去分詞形に起こる。形容詞の短音化は単数中性語尾 $-t$ (/t/[d]) を伴う

形（＝単数中性形）に起こる。屈折語尾 *-te*, *-t*（動詞）, *-t*（形容詞）は音韻構造に関してはほぼ同じであるにもかかわらず、動詞と形容詞の語幹長母音に対し同じ短音化規則を適用できないのでそれぞれ別に扱う。長音化については§4.1で言及する。なお、以下 §2 で示す音声形は音声的变化である短母音状音化規則 (§3) を適用する以前の音声形であり、また論点をわかりやすくするため種々の音声的同化（特に schwa [ə] の同化）規則を適用する以前の形であるので、これが語レベルにおける最終的発音形ではない場合が多々ある。

2.1. 動詞屈折形における短音化:

弱変化第2類動詞の語幹には長母音も短母音も現われ得る。この中、語幹母音が長母音であるのは語幹末音素がゼロ（ただし、*ske* (/sge:/[sge:ʔ]) の一語のみ）または単一子音 /b, d, g, s, l, r, n/ のいずれかのときである（デ語には /z/ はない）。この中、短音化および語幹末子音の変化に関係するのは長母音＋単一閉鎖音 (/b, d, g/) を語幹としてもつ動詞の過去形（以下、*-te* 形と呼ぶ）および過去分詞形（以下、*-t* 形と呼ぶ）においてのみである。その他の屈折形には短音化は起こらない: (例) 語幹 *kφb-* (/kφ:b-/): 長音のままの不定詞形 *kφbe* [kφ:bə], 現在形 *kφber* [kφ:ʔbʌ], 現在分詞形 *kφbende* [kφ:bənə], 命令形 *kφb* [kφ:ʔb] および短音化する過去形 *kφbte* [kφbdə], 過去分詞形 *kφbt* [kφbd].

語幹末子音が /b/ または /g/ のとき、*-t(e)* 形における語幹長母音の短音化は必ず（＝強制的に）起こる。そして、/g/ は *-t(e)* 形では（別の形態音韻規則によって）[g] となる（その他の変化形では /g/ は通常の音節末条件異音規則にしたがって、ゼロ（狭母音状音の後）, [j] ([i(:)], [y(:)] 以外の前舌母音状音の後）, [w] ([u(:)] 以外の後舌母音状音の後）となる）。

さて、ここで§1.2で述べた作業基準「量も質も異なる音声形をもつ長・短母音対^{つゝ}」に沿って例示してみる（長音音声形をもつ典型的、代表的屈折

形としては語幹 + *e* (/ə/) から成る不定詞形を用いる；発音形は原則として RM1, 2 に共通のもの):

長母音 + /b/ の語幹の動詞:

dræbe, dræbt(e) [dʁɛ:bə], [dʁäbd(ə)],
stræbe, stræbt(e) [sdʁɛ:bə], [sdʁäbd(ə)],
 (/rɛ:/=[ʁɛ:], /rɛ/=[ʁä]),
råbe, råbt(e) [ʁɔ:bə], [ʁʌbd(ə)],
skabe, skabt(e) [sgæ:bə], [sgabd(ə)],
tæbe, tæbt(e) [tæ:bə], [tabd(ə)];

長母音 + /g/ の語幹の動詞:

koge, kogt(e) [kɔ:wə], [kʌgd(ə)],
bage, bagt(e) [bæ:jə], [bagd(ə)],
smage, smagt(e) [smæ:jə], [smagd(ə)],
bruge, brugt(ə) [bʁu:ə], [bʁo-/bʁɔgd(ə)] (RM1), [bʁɔgd(ə)]
 (RM2), (NB: [ʁo] は /ru/ の, [ʁɔ] は /ro/ の条件異音)。

上例から明らかのように, *-t(e)* 形における短音は短母音の音声形の質となっている。したがって, たとえば *tæbe* の /a:/ は *-t(e)* 形では /a:/ → /a/ となり, /a/ が [a] (軟口蓋音の前の異音) となったことは明らかである。もし /a:/ → [æ:] (/r/ 環境以外の異音) がそのまま短音化したなら [æ] になるはずである (cf. §3)。したがって上例の短音化は音素的短母音化である。

量のみで相異で質の相異のない長・短母音対 (たとえば, *købe, købt(e)* [kʰɔ:bə, kʰɔbd(ə)], *slæbe, slæbt(e)* [slɛ:bə, slɛbd(ə)], *søge, søgt(e)* [sʰɔ:jə, sʰɔgd(ə)], *sluge, slugt(e)* [slu:ə, slugd(ə)]) の場合, 上述の作業基準からだけではその短音化が短音素化だとする明白な根拠はないわけであるが, 量と質の異なる母音対に対する音韻規則, すなわち短音素化と

同様にこの場合も音素的变化だとすれば新たに別の規則を設ける必要がないことになる。このような積極的な理由が見出せるので、*/-b, -g/* に終る動詞の *-t(e)* 形における短音化は全て「短母音化」すなわち音素的短音化であるといってよいであろう。この短音化を形態音韻規則とする他の理由は§2.3で述べる。

長母音+*/d/* の語幹をもつ動詞の *-t(e)* 形は */-b, -g/* 動詞の場合とは事情が異なる。語幹末 */d/* は *-t(e)* 形で必ず脱落するが、母音は長母音がそのまま保たれるのを原則とする：例： *fþde* [fþ:ðə], *fþdte* [fþ:də], *fþdt* [fþ:ʔd]。しかし、*mþde* [mþ:ðə] のみは *-t(e)* 形で短音化される： *mþdt-(e)* [mþd(ə)]。また、*blþde* [blþ:ðə], *stþde* は非短音化形および短音化形の二種の *-t(e)* 形をもつ。したがって、*/-d/* 動詞では (*/d/* 脱落は別の規則として) 短音化しない場合を原則とし、*mþde*, *blþde*, *stþde* の短音化を有標化するのが妥当ということになる。この三つの動詞では短音化の際に音声形に質の相異はみられないので§1.2の作業基準は用いられないわけであるが、この短音化も *kþbe*, *slæbe*, *sþge*, *sluge* などの */-b, -g/* 動詞の場合と同様の理由により音素的变化であるとすれば、音韻規則を増やさないですむことになる。

2.2. 形容詞屈折形における短音化：

形容詞単数中性形（以下、*-t* 形と呼ぶ、動詞の方は *-t(e)* 形とする）における短音化も音素的变化である。形容詞語幹（＝いわゆる「原形」）に長母音音素が現われ得るのは語幹末音素がゼロ（この場合、母音は必ず長母音）または */b, d, g, v, s, l, r, n/* のいずれかの場合である（*/m/* がないのは共時音韻論的には‘偶然の空白’かと思われる）。以下、§2.1の動詞 *-t(e)* 形における短音化と対照させながら、形容詞の短音化をみていくことにする。分類は長母音後の語幹末音素によって行なう。

a) ゼロ（すなわち、長母音で終る）語幹では *-t* 形で必ず短音化が起こる：*(/ɔ:/→/ɔ/) blā, blāt* [blɔ:ʔ, blɔd], *grā, grāt* [grɔ:ʔ, grɔd],

små, rå; その他 *fri, ny* etc. (長母音に終る語幹をもつ(弱変化第2類)動詞は *ske* /sge:/ のみであるが、これは短音化しない。)

b) /b/ に終るもの: 動詞の場合と同様に短音化するはずであるが、*dyb, dybt* [dy•ʔb, dybd] の一例しかみつからなかった。

c) /d/ に終るもの: 動詞の場合には原則として短音化は起こらないのに対し、形容詞の方は原則として短音化する。/d/ の脱落は動詞の場合には必ず起こるが、形容詞では(例外的に)脱落しないこともある:

c-1) 短音化され、/d/ が脱落するもの: (/a:/→/a/) *flad, fladt* [flæ•ʔð, flad] (cf. 後述(c-3) の *lad, ladt* [læ•ʔð, læ•ʔðd]), (/ɔ:/→/ɔ/) *våd, vadt* [vɔ•ʔð, vɔd], (/o:/→(/o/ではなく)/ɔ/) *god, godt* [go•ʔ(ð), gɔd] (cf. 動詞 *bruge, brugt(e)* [bʁu:ə, bʁɔgd(ə)] = /u:/→/o/); その他, *blid, hvid, strid, solid* [so' li•ʔð], *bred, fed, vred, blød, død, rød, sød* etc.;

c-2) 短音化は起こらないが/d/は脱落するもの: *sprød, sprødt* [sbʁø•ʔð, sbʁø•ʔd] (RM1), [sbʁœ•ʔð, sbʁœ•ʔd] (RM2)。このタイプは *sprød, spæd, vid* の3語のみであり、この中、*spæd, vid* は後述(c-3)のタイプの音声形をもつ話者(特に若い世代)もいる;

c-3) 短音化も/d/脱落も起こらないもの: *lad, ladt* [læ•ʔð, læ•ʔðd]; その他 *fad, kåd* および一部の話者で *led, ræd* ((c-1)とする話者もいる), そして上述の *spæd, vid* ((c-2)とする話者もいる)。

なお、これら(c-2), (c-3)については, Basbøll (1973/4), Rischel (1970) ともに '例外' としている。ついでながら、長母音+ /d/をもつ形容詞で統語的には中性形であっても -t の付加が避けられるものがいくつかある: *glad, ked* および外来語 *gravid, invalid, perfid, stupid* (主強勢は末尾音節)。なお, *solid* [so' li•ʔð] は外来語であるが、音韻

的には本来語と同様のふるまいをし (c-1) に属す。

d) /g/に終るもの: 動詞の -t(e) 形では全て短音化し, /g/ は [g] となるのに対し, 形容詞では短音化せず, それ故 /g/→[g] も起こらないものが大勢を占める:

d-1) 短音化しないもの: *svag*, *svagt* [væ•?j, svæ•?jd], *klog*, *klogt* [klɔ•?w, klɔ•?wd]; その他 *veg*, *klæg*, *læg*, *træg*, *myg*, *spag*, *vag* etc.

d-2) 短音化するものとししないものの両形をもつもの (短音化すれば /g/→[g]): *rig*, *rigt* [vi•?, vi•?d/ɿgd]・この他 *lig*, *slig*, *syg* etc. の数語。しかし, RM2 の中の若い方の世代では非短音化形が一般的となってきた (Brink/Lund, 1975, 431)。いずれにせよ, これらの語では何らかの形で短音化は有標化されなくてはならないであろう。

ついでながら, 正音学で -g 形容詞として扱われる *skæg*, *skægt* [sgæ•?g, sgæ•?gd] の場合, 原形末尾の [g] は /k/ の音声形であると考えた。したがって, *skæg* は /sgæ:k/ ということになり, /g/ に終る形容詞ではないことになる。(なお, 本節 §2.2 の初めで長母音後に現われ得る語幹末子音を列挙したが, この *skæg* の /k/ は省略した。形容詞に限らず一般に /p, t, k/ の直前には長母音は現われないが, 長母音をもつ語が少数ある: *læg* <(共性) こむら>, <(中性) ひだ>, *skæg* (sb.), *væg*, *æg* <(共性) 刃>, <(中性) 卵>; *snedker*, *præk*, *brøk* etc.

e) 以上の他, *lys*, *lyst* [ly•?s, lysd] では短音化が起こるが (cf. 動詞 *lyse* の過去分詞形 *lyst* [ly•?sd]), その他の長母音 + /s/ 形では短音化は起こらない: *vi(i)s*, *vi(i)st* [vi•?s, vi•?sd], *hæs*, *hæst* [hæ•?s, hæ•?sd] etc. この *lys* は *hård*, *hårdt* [hv•?, hv•:d] (中性形で *stød* のないことに注意, cf. 拙論 (1976), 14f.), および *stiv*, *stift* [sdi•?w, sdifd] (cf. *grov*, *groft* [gʁaw?, gʁafd]) とともに例外としてとり扱う

のが適当と思われる。

この他のタイプの形容詞では中性形における短音化は起こらない。

2.3. 以上みてきたことからわかるように、同じ長母音 + /b, d, g/ の語幹をもち、同じような音韻構造の -t (e), -t という語尾をもちながら、音長変化の状況が動詞と形容詞では非常に異なる。 /-b/ に終る語幹は形容詞の方が一例しかないので比較対照できないが、 /-d/, /-g/ に終る語幹では音長変化の一般的傾向が動詞と形容詞とでは丁度逆になっている。特に /-d/ 語幹の場合は興味深い。動詞では原則として短音化せず、形容詞では原則として短音化する。ところで、長母音 + /d/ 語幹をもつ強変化動詞の中で母音変化を伴わず語幹 + t による過去分詞形をもつものでは、 /d/ 脱落に関しては弱変化第2類動詞の場合と同様に例外なく脱落するが、音長変化に関しては第2類動詞とは異なり形容詞と同様に音素的短音化が起こる: *græde*, *grædt* [vɛ:], [vā], (for)lade, (for)ladt [æ:], [a]。短音化しないのは *bede*, *bedt* [be:ðə, be•?d] および <苦しむ> 以外の意味の *lide* だけであろう。

/-g/ 語幹の場合も音長変化の状況が動詞(短音化)と形容詞(非短音化)とでは逆になっている。したがって、これら弱変化第2類動詞と形容詞の短音化に対し共通の音韻的動機に基づく共通の音韻規則を立てることはできない。つまり、この短音化は動詞、形容詞に別々に適用される二つの異なる範疇的な形態音韻規則として設定されなくてはならない。

特に興味深いのは動詞 *bruge*, *brugt(e)* [bʁu:ə, bʁɔgd(ə)], 形容詞 *god*, *godt* [go•?(ð), gʌd] で、語幹母音が -t(e) の前で短音化すればかりではなく、一段開口の短音素に変わっていることである(この後者の音韻的事実は有標化されなくてはならない)。このことからこれら動詞、形容詞の -t(e) 形における短音化が RM1 以前にすでに確立していたことがわかる。そして、 /d/ をもつ強変化動詞の過去分詞形における短音化も *stiv-stift*, *grov-groft* (adj.) や *skrive* (vb.) -*skrift* (sb.) [sgvi:və]—

[sgʁɛfd] (RM1), [sgʁi:u] – [sgʁɛfd] (RM2) もまさに古く確立したものである。

Bolbjerg (1968, 97) によれば、ゲルマン語の動詞全体はその音韻的特徴から二つのグループに分けられる：一つは非短音化，前舌母音，歯音，弱変化動詞，もう一つは短音化，後舌母音，非歯音，強変化動詞である。たしかに Bolbjerg がいうようにデ語の弱変化第2類動詞の-*t(e)*形で単一の語幹末子音 /d, s, l, r, n/ の前の語幹長母音は短音化しない。しかし，この言明はなぜ動詞と形容詞の短音化の音韻的条件が逆になるのかの説明とはならない。文レベルでの品詞の相異は統語的，意味的にそして音韻的にも（たとえば弱化によって）明瞭にわかるであろうが，それは別として語レベルでの品詞の相異もできるなら区別しようとする力が働いて上述のような音韻的条件の相異が存在していることも考えられよう。音長変化に限らず，特にアクセント位置の相異によって品詞の区別をするということなどは多くの言語にみられることである。

ところで，Basbøll (1973/74, 64) は短音化しない *klogt* (adj.) と短音化する *kogt* (vb.) の相異は接続にあるとする：すなわち，/klo: g#t/ vs. /ko: g+t/。しかし，この接続設定に関する音韻論的に納得のいく論拠は何ら示されていない。そのような接続を設定したとすると，短音化しない *lyst* (vb.) と短音化する *lyst* (adj.) の相異は *klogt* (adj.) と *kogt* (vb.) の場合とは逆に動詞の方が /ly: s#t/ で形容詞の方が /ly: s+t/ ということになるのだろうか。このような接続を立てるより形容詞と動詞に別々の規則を立てた方が適切であろう。

3. 有声接近音の直前における短母音状音化：

3.1. §2 で述べた形態音韻的短母音音素化に関しては保守的な RM1 と進歩的な RM2 の区別はほとんど必要ではなかった。それは両口語の各音素の音声形における相異がとり上げた現象に関しては大差がないからであり，

たとえ異なったとしても音長変化が音素的变化であり、音素体系としては両口語間にはほとんど相異がないからである。

さて、§2で示した音声形は特にRM2では語レベルにおける最終発音形とはいえないものがある。というのはRM2では(特に音節末の)有声接近音 (voiced approximants) [ɹ] (←/r/), [j] (= [i]) (←/g/) [w] (= [u]) (←/v, g/), [ð] (←/d/) の前の長母音が短音化されるという規則がかなり一般的となっているからである。この短母音状音化は発話速度には関係せず、そして屈接形にのみあてはまる規則ではなく全ての‘語’に適用され得る規則であり、ほぼ音声的条件のみによる規則である。とはいえ、上記4個の接近音の前の長母音が全て同じ程度に短音化されるわけではないし、‘語’の長さ (= セグメント数) とか stød の有無によっても異なり、あるものは強制的短音化であり、別のもは随意的短音化であったり、その随意性も‘語’の構造に関係するものもあれば (RM2中での) 世代の相異に関係するものもあるといった具合で非常に複雑である。これに加えて、ごく最近では [j], [w], [ð] 等の脱落も起こり始めているようで、この現象が確立すれば音長変化の状況は本論で記述しているものとはかなり変わってこよう。(詳しくは Brink/Lund, 1975, §§32—49, その他のセクション参照。)

このような状況ではあるが、以下ではかなり明白な短母音状音化のケースをいくつか示し、§2で述べた短母音音素化との区別の必要性を明らかにしたい。

3.2. 上述のように、短母音状音化が実現するためには種々の要因がからまっているが、次の場合はRM2では短母音状音化が強制的であると思われる (cf. Basbøll (1969), Brink/Lund(1975, §§33ff.)): (1)単音節形, (2)当該接近音後に子音をもつ形 (当該接近音と後続子音が同一語幹に属するならば完全に強制的に、二子音間に形態素境界とか音韻の音節境界があってもほぼ強制的に), および, (3)‘重い語’ (= セグメント数の多い語)。一

方、第2音節に schwa をもつ2音節語では短音化は稀であり、[w]の前では [a:] および [v:] は短音化しない。この他の場合は強制的ではなくても一般に短音化する傾向が強い。

以下では §2 の動詞と形容詞に関連する例を主として用いるが、この短母音状音化が動詞と形容詞にのみ適用され得る規則ではないことは上述の通りである。

まず [ø] の前の長母音の短音化であるが、動詞の語尾として -e (/ə/) を含む屈折形では上述のように短音化はまず起こらない: *møde* [mø:ðə] (ごく若い世代ではこの場合でさえ短音化するといわれる: [møðð]). 一方、/ə/ が後続しない場合、たとえば形容詞の原形 (=単数共性未知形) では短音化が起こる: *flad*: (RM1) [flæ·?ð] > (RM2) [flæð?], *våd* [vɔ·?ð] > [vɔð?]. これらの [æ], [ɔ] は長母音の質はそのまま長さだけが短縮されたもので、短音素化の結果である中性形 *fladt* [flad], *vådt* [vʌd] の [a], [ʌ] とは質の点で異なることは明瞭である。質の相異のない長・短母音対にも同じことが言えよう。たとえば, *hvid*, *solid* の [vi·?ð] > [við?], [so'li·?ð] > [so'lið?] の [i] は上述の短母音状音化の結果であり、中性形 *hvidt*, *solidt* [vid], [so'lid] の [i] は短母音素化の結果 (/i:/ → /i/ → [i]) であることは §2 で述べた通りである。

[j] (←/g/): /g/ は [i:], [y:] 以外の前舌長母音状音後では RM1, 2とも [j] となる(なお, *løj*, *høj* [lʌj?, hʌj?], *bleg*, *vej* [blaj?, vaj?] などの後舌短母音状音 (←/ɔ/, /a/) の後の [j] は /j/ から派生したものとする)。したがって、たとえば形容詞 *veg(t)*, *klæg(t)*, *svag(t)* は RM1では [ve·?j(d), kle·?j(d), svæ·?j(d)] となるが、RM2ではこれに短母音状音化の規則が付加されるので [vej? (d), klej? (d), svæj? (d)] となる。

[w] (←/g/) の前の長母音状音の短母音状音化は、たとえば形容詞 *klog(t)* [klɔ·?w(d)] > [klɔw? (d)] のようになる。(なお、/g/ は狭母音状音の後ではゼロとなるので、その母音が長母音状音でも [j, w] の前に

立たないことになるので短母音状音化は起こらない。短母音状音 [i, y, u] の後でも /g/ はゼロとなるのであるが、この場合短母音状音は「代替的に」長母音状音化され [i:, y:, u:] となる (cf. §4.2)。この狭母音後の規則と類似のものであるが、1950年以後生れの話者では前舌長母音状音後の [j] は脱落するが、その場合にも短母音状音化は起こらない。)

[w] (←/v/) の前での短母音状音化も少くとも単音節形では強制的である: 形容詞 *skæv(t)* [sgɛ•?w(d)] > [sgew?(d)], *sløv(t)* [slø•?w(d)] > [sløw?(d)], *lav(t)* [læ•?w(d)] > [læw?(d)]。しかし、後舌開母音 [ɑ:], [ɔ:] はRM2でも [w] の前で通常短音化しない: 形容詞 *brav(t)* [bʁɑ•?w(d)] (RM1, 2)。

音節末 [ʌ] (←/r/) の前の長母音状音の短音化は /r/ の後に /ə/ が続かないかぎりほぼ強制的である (/rə/ の前での短母音の長母音状音化については §4.2 で述べる)。特に弱変化第2類動詞の -t(e) 形ではすでにRM1の末期には短音化していたようである: 動詞の例 (RM2): *føre*, *førte*, *ført* [fø:ʌ, fɔʌdə, fɔʌ?d], *lære*, *lærte*, *lært* [lɛ:ʌ, lɛʌdə, lɛʌ?d]。 *ført(e)* の場合 /ør/ なら発音形は [œʌ] となり (cf. *børn*(sb.) [bœʌ?n], *før* (vb.) [gœʌ]), *lært(e)* の場合 /er/ なら [äʌ] となる (cf. *lærke*(sb.) [läʌgə], *bær*(sb.) [bäʌ]); 形容詞の例 (RM2): *nær(t)* [nɛʌ?(d)], *dyr(t)* [dyʌ?(d)], *mør(t)* [møʌ?(d)], *sur(t)* [suʌ?(d)], *stor(t)* [sdoʌ?(d)]。

なお、この接近音の前での短母音状音化によって質的に相異のない音声形をもつ長・短母音の表層での中和が起こってくるが、未だ音素体系を大幅に修正するまでには至っていない。

以上、§§2—3で基底セグメント (= 音素) から音声形 (最終的発音形とは限らない) に至るまでに現われる二種の短音化の説明をしてきた。一つは動詞、形容詞の各々にのみあてはまる形態音韻的短母音化であり、もう一つは所定の条件を満たせば全ての音韻的語に適用される音声的短母音状音化である。この二種の短音化を動詞、形容詞を例にして表Iに示す (括

弧内の屈折形は短音化しないもの):

表 I

	短音素化 (RM1, 2)	短母音状音化 (RM2)	音 声 形 (RM2)
(tæb)			(tæ:bə)
tabt	+		tabd
(bæɡ)			(bæ:jə)
bagt	+		bagd
(møðe)			(mø:ðə)
mødt	+		mød
(køʀe)			(kø:ʌ)
kørt		+	køʌʔd
(blā)			(blɔ:ʔ)
blāt	+		blʌd
(dyb)			(dy:ʔb)
dybt		+	dybd
flad		+	flæðʔ
fladt	+		flad
lad		+	læðʔ
ladt		+	læðʔd
sprøð		+	sbʌæðʔ
(sprødt)			(sbʌæ:ʔd)
svag		+	svæjʔ
svagt		+	svæjʔd
klog		+	klɔwʔ
klogt		+	klɔwʔd
(rig)		(/g/脱落)	(ʁi:ʔ)
(right)		(/g/脱落)	(ʁi:ʔd)
right	+		ʁigd
lav		+	læwʔ
lavt		+	læwʔd

4. 長音化:

4.1. 名詞の屈折形における長母音化:

この音素的長音化は *e* (/ə/) を含む屈折語尾 (*-en*, *-et*, *-e*, *-er*) を伴

う変化形のごく一部に起こる。1) 原形が /v/ に終る語の中では次の二語にのみ長音化が起こる: *hav* (*havet*, *have*) [haw] ([hæ•?vəð, hæ•?wð], [hæ:və, hæ:w]), *lov* (*loven*, *love*) [law] ([lɔ•?vən, lɔ•?wn], [lɔ:və, lɔ:w]) (cf. 長音化しない *rav* [kaw], *skov* [sgaw?], *tov* [taw] etc.)。したがって、これら二語の長母音化が有標化されることになる。次に、2) 短母音 + /d/ 名詞の場合、母音が /a/ ならば /ə/ の前で必ず長音化すると思われるが (*bad*, *badet*, *bade* [bað, bæ•?ðəd, bæ:ðə]), その他の母音ではおそらく長音化しない方が多いであろうが断定はできない (長音化する名詞: *bed*, *smed*, *fred*, (*sted* (RM1)), *bad*, *blad*, *fad*, *had*, *mad*, *brud* <花嫁>, *bud* <使い>, *kød*, *skød*, *stød*, *stad-staden* etc.; 長音化しない名詞: *bid*, *slid*, *spid*, *vid*, *led* (<端, 傍 etc.> 以外の意味), *bred*, *brud* <破れ>, *bud* <命令>, *brod*, *skod* etc.)。この他、3) アクセントのある短母音に終る名詞の屈折形でも長音化が起こるが, *nu* [nu], *vindue* ['ven, du] を除けば主としてフランス系外来語に起こるものである (*bureau* [by'ko], *buffet* [by'fe] etc.)。

この他、'例外的' に形容詞 *grov* [gɔaw?] の -e 形で長母音化が起こる: *grove* [gɔ:və, gɔ:w]。

4.2. 代替的長母音状音化:

RM2 (および後期RM1) では /rə/ が母音の後で [ʌ, a, v] (三音は条件異音) になるが、この /rə/ の音声形の前に現われる短母音は長母音状音化する。そのため /rə/ の前の短母音と長母音は表層では中和する: (短母音—長母音) *svirre-svire* → [svi:ʌ], *kærre-kære* → [ke:ʌ], *kurre-kure* → [ku:ʌ], *borre-bære* → [bɔ:v]。

5. 以上、デ語に二種の長・短音化があること、そしてその区別が重要であることを述べてきた。この二種の短音化は本論でとり上げた単形態形とか屈折による複形態形にのみ関係するのではなく、その他の音韻単位にも

関係するという点でも重要である。すなわち、派生形、合成形などの複形態にも二種の短音化がみられる。たとえば、短母音化: *bage*+*værk*= (合成形) *bagværk* ['bawvæΔg]; 短母音状音化: *bage*+*ning*= (派生形) *bagning* [bæjneg] (cf. *bagt(e)* [bagd(ə)])。また、文レベルでも統語的に文強勢を失った語の長母音は短母音状音化される: *tage plads* [tæ 'plas] (cf. ['tæ•?]), *have travlt* [hæ 'tɾawʔld] (cf. [hæ•?]), *gå i skole* [gɔ i 'sgo:lə] (cf. ['gɔ•?]), *stå op* [sdɔ 'ɔb] (cf. [sdɔ•?]), *køre bil* [køΔ 'bi•ʔl] (cf. ['kø:Δ]). 同様に文レベルで、強調とか対比のために短母音が長母音状音化されることがある: *Søren's også!* ['sœ::Δns ,Δsə].

最後に、短音化の種類とか適用範囲の問題ではなく、短音化に関連する弁別素性のことに触れてみたい。デ語においては少なくとも音声レベルでは、たとえば, *bade* (vb.; sb. pl.) [bæ:ðə], *badning*(deriv.)[bæðneg], *bad* (sb. sg.) [bað] の [æ:, æ, a] の三音は区別されなくてはならない。この場合、長さ([long])または緊張性([tense])という素性のどちらか一つだけでは三音を区別できない。両素性が必要である。すなわち, [æ:]=[+tense, +long], [æ]=[+tense, -long], [a]=[-tense, -long] となろう。(前述の強調による長母音状音化では [-tense, +long] の音もあることになる。) かつて拙論(1974)で、緊張性という素性に関する現在の音声的定義が不適當であることを述べ、同時に緊張性と音長性が必ずしも相補的な素性ではないことを述べたが、本論でも同じことをくり返し強調したいと思っている。

なお、母音の音韻的变化は長・短音化の他にも同化、弱化、脱落等々の重要な音韻現象が多々あることはいうまでもないことであろう。

(Aug. 1978)

参考文献

- Basbøll, Hans (1969): "The Phoneme System of Advanced Standard Copenhagen," *Annual Report of the Institute of Phonetics, Univ. of Copenhagen (=ARIPUC)* Vol. 3, 33—54.
- " — (1970): "Notes on the Phonology of Danish Imperatives with a Digression on Vowel Quantity," *ARIPUC* Vol. 4, 15—42.
- " — (1973/74): *Diftonger; Konsonanter*, Copenhagen (mimeographed, 46+87 pp.).
- Becker-Christensen, Christensen (1975): *Bogstav og lyd i dansk*, Copenhagen.
- Bolbjerg, Alfred (1968): *Verbalsystemet i Nydansk*, Copenhagen.
- Brink, Lars & Jørn Lund (1975): *Dansk Rigsmål*, Copenhagen.
- Rischel, Jørgen (1969): "Notes on the Danish Vowel Pattern," *ARIPUC* Vol. 3, 177—206.
- " — (1970): "Consonant Gradation: A Problem in Danish Phonology and Morphology," *Proc. Int. Conf. Nordic and Gener. Ling. 1969*, 460—80.
- 間瀬英夫 (1974): 「デンマーク語の母音——質と量の関係について」, *Idun* II, 3—36.
- " — (1976): 「デンマーク語の長・短母音——母音音長は後続子音の数から予測できるか」, *Idun* III, 3—34.